



## つくば機能植物イノベーション研究センター 形質転換植物デザイン研究拠点 研究セミナー（64）

日時：2021年7月15日(木) 17:00 -

場所：Zoom オンラインで実施

Zoom ミーティングに参加するには以下へアクセスしてください

<https://us02web.zoom.us/j/85059993910?pwd=TlBzZjYvWCt3a1VSQ01QNktXSEtkZz09>

# 遺伝資源探索から 育種素材・育種技術開発まで

**吉岡洋輔**

**筑波大学 つくば機能植物イノベーション研究センター・准教授**

品種改良の基礎となる育種学は「ものづくりのための学問」であり、その主たる目的は育種のための理論の構築と育種技術・育種素材の開発である。近年、ゲノム解析技術やそれを利用した育種技術は大きく発展し、様々な農業問題を解決する新品種が生まれている。一方で、未解決の農業問題も数多く残されており、これまで以上に育種への期待が高まっている。植物育種学分野では世界的に主要な野菜であるウリ科作物やアブラナ科作物、今後普及が期待される熱帯アジア原産のヒユナ、擬似穀類のソバやアマランサスを対象に、遺伝資源の探索から育種素材・育種技術開発までの多岐にわたる研究を行ってきた。最近では農林水産省委託プロジェクト研究に参画し、アジアにおける野菜類遺伝資源の探索、収集した遺伝資源の増殖および特性評価等を行っている。また、省力栽培適性、耐病性および収穫物の品質などに関わる有用形質をもつ遺伝資源を用いて、遺伝解析材料となる分離集団を育成し、マップベースの遺伝解析により、当該形質のDNAマーカー選抜技術の開発を進めている。さらに、戻し交雑育種等により、育種素材となる品種の育成にも取り組んでいる。今回のセミナーでは、植物育種学分野が行っている野菜類（ウリ科、アブラナ科、ヒユ科）の遺伝資源探索、遺伝資源の特性評価、育種素材開発および育種技術開発等の概要を紹介する。

キーワード：遺伝資源、農業形質、遺伝解析、DNAマーカー選抜技術、育種素材化

世話人：遺伝子実験センター・壽崎